



社会福祉法人  
 ロザリオの聖母会  
 千葉県旭市野中4017  
 Tel (0479) 60-0600  
 ホームページアドレス  
<http://www.rosario.jp>  
 Eメールアドレス  
 honbu@rosario.jp



第20回福祉作文コンクール入賞者のみなさん（平成23年12月7日撮影）

第21回（平成24年度）ロザリオ作文コンクール

福祉作文全体評

【審査員】

鏑木 正（元中学校長・指導室長）

真久 孝昭（元中学校長・指導主事）

松井 安俊（元小学校長・指導主事）

第二十一回福祉作文に百六十六の作品を寄せ  
 てくださいます。ありがとうございます。

児童生徒に福祉について重要さを御指導され、  
 作文を勧めてくださった小中学校の校長先生、  
 担任の先生、父兄の皆様には御礼を申し上げます。

二十六年前、前理事長だった「細渕哲夫」さ  
 んが『日本の未来を担う子どもたちに、福祉に  
 ついて関心を持っていただくよう、また、さまざ  
 まな施設があり、光のあたりにくい人々のため  
 に、日夜奉仕をされている人もたくさんいらっ  
 しゃることを知っていたらどう、』

## 4年生選評

そして、家族、友人、地域の方々に対して『あたたかい心を持って、自分のできるお手伝いを積極的にしていく人間に育って欲しい』と話され、福祉作文の応募を各学校にお願いすることになりました。

応募された作文はどれも優秀な内容で甲乙つけ難いものばかりで、あたたかい、やさしい気持ちにあふれたものばかりでした。その中から広く福祉の社会的問題に目を向けたもの、福祉の優れた奉仕体験をされたものなどをなんとか選ばせていただきました。

社会福祉法人「ロザリオの聖母会」は、旭市、香取市を中心に「精神科、内科、就労支援、重症心身障害者支援、介護、身体障害者支援、高齢者支援」など、五百余人の職員とボランティアの皆さんが日夜、お世話をさせていただいております。  
どうぞ、市民の皆様もお力添えをお願い申し上げます。

○1席 旭市立中央小学校

林田陽飛さん

【ボランティアをやって】

手助けをしてくれる人を守っている人がたくさんいることに気づいたのは良かったですね。

○2席 旭市立琴田小学校

吉野杏優さん

【わたしのおじいちゃんとおばあちゃん】

四人のお年寄りのお世話をしたことは立派です。

○2席 旭市立嚶鳴小学校

伊藤温規さん

【ぼくたちと福祉】

障害があっても希望をもって生きていく人があることに気づいたのはすばらしいことです。

○3席 旭市立共和小学校

加瀬碧さん

【ボランティア活動について】

ボランティアについて調べたことは良かったですね。

○3席 旭市立三川小学校

神原希羽さん

【私にできること】

寝たきりの大おばあさんによくお話をしなぐさめてください。お話ししてくれるのを待っていますよ。

○3席 旭市立萬歳小学校

實川志穂さん

【私の知らなかったこと】

社会福祉について調べたのはえらかったですね。

## 5年生選評

○1席 銚子市立双葉小学校

富田凌さん

【「受けつがれる命のバトン」】

良いタイトルですね。おじいさんのお世話をよくしてください。

○2席 旭市立中央小学校

小林ひとみさん

【当たり前の幸せ】

当たり前前のしあわせに気づいたのはえらかったですね。

○2席 旭市立中和小学校

高山愛美理さん

【祖母と私、命の大切さ】

社会の心ない行動をする人を目をよく向けています。

○3席 旭市立飯岡小学校

加藤希美さん

【介護について】

日本の社会福祉の問題点についてよく調べましたね。

○3席 匝瑳市立豊栄小学校

高橋空さん

【お父さんの仕事】

老人ホームを見てお手伝いしたのはえらかったですね。

○3席 旭市立中和小学校

伊藤愛美さん

【サヴァン症候群とアスペルガー症候群】

むずかしい二つの症候群についてよく調べ感心しました。



## 6年生選評

○1席 旭市立干潟小学校

中村柊斗さん

【障害者やお年寄りの気持ち】

足の切断手術をして義足生活の祖母の苦しみを目のあたりにして、ゆずる気持ちや手伝うやさしさが大切だと気づきました。障害者もお年寄りも同じ人間として助け合い協力し合って生きていこうと強く訴えていて共感できます。

○2席 香取市立竟成小学校

小山田智輝さん

【お年寄りとのふれ合いと笑顔】

老人施設でのお年寄りとの交流によって、お年寄りに対する心の変化が生きていきと表現されています。わずか二日間の交流でしたが、お年寄りから多くのことを学ぶことができました。

○2席 旭市立中央小学校

中西未渚美さん

【私の祖母】

脳こうそくで倒れた祖母の入院

から転院、自宅療養までの経過や、家族が心を一つにして介護にあたっている様子が詳しく描かれています。介護施設が充実して、いつでも利用できるようになってほしいという切実な願いが実感できます。

○3席 旭市立干潟小学校

柴山啓さん

【となりのおばあちゃん】

息子と二人ぐらしの隣のおばあちゃんは、高齢で足・腰が悪く、身の回りのことがよくできない。見かねて自主的にお手伝いを実行したことに感心しました。

前より元気になったおばあさんとの交流を通して助けを求めている沢山の人たちを助けてあげたい、と考えるようになったのは立派です。

○3席 旭市立中央小学校

多田遼平さん

【兄の兄】

軽度の障害があっても、部活や自転車・野球の練習などに真面目に取り組む頑張り屋のお兄さん。

大好きな電車の一人旅を心配しながらも温かく見守る家族の思いや

りがよく描かれています。兄のような人たちが困らない世の中になってほしいという願いに共感できます。

## 中学1年生選評

○1席 旭市立飯岡中学校

加瀬愛実さん

【誰にでも明るい社会を】

寝たきりだったおばあさんがショートステイを始めてから、施設での生活を楽しみにしている様子が、生き生きと描かれています。また、介護保険制度のお陰で、ハンディキャップがあっても、いろいろな人々と関わりがもてるような、明るい社会になりつつあるのを歓迎するとともに、自分もそういう社会を支えていきたいと考えたのは立派です。

○2席 旭市立海上中学校

宇野詩織さん

【支え合う福祉】

祖母の介護や母親の話などから、どうしたら安心して暮らせる

か、これからの福祉について考えを深めています。そして、人に優しく、手厚くだれもが納得のいく福祉でなくてはならない、と訴えています。

○2席 銚子市立第二中学校

加瀬翔太さん

【外川駅のボランティア】

始めは、やりたくないと思っていた駅の清掃ボランティアだったが、待合室にいたおばあさんにほめられ、頑張ったので、さわやかな気分を味わうことができました。人の役に立ったことを実感させてもらったことに気づき、これからもボランティア活動に積極的に参加しようと考えたのは立派です。是非、実行してください。

○3席 匝瑳市立八日市場第二中学校

増田康希さん

【祖母の介護体験】

寝たきりのおばあちゃんの介護で苦労した母親の様子が具体的に描かれています。多くの介護職の方々にお世話になったことに感謝するとともに、家族のためには、自分ができることを全力で手助け



したいという強い意志があらわれ  
ています。

○3席 旭市立第二中学校

市川麻央さん

【神様からの試練】

幼児の頃にもった怖いという思  
いを、小学校のクラスにいた障害  
児と打ち解けることで克服できま  
した。障害者への対応には、理解  
と思いやりが大切であると訴えて  
います。

中学2年生選評

○1席 旭市立第二中学校

高橋直大さん

【あれから一年、介護について】

大好きだった曾祖母が入院し介  
護が必要になったが、何もできな  
い自分がいました。しかし、徐々  
に曾祖母の介護をするようになり  
ました。そのことを通して、家族  
全員で協力することの素晴らしさ  
を体得しています。

○2席 旭市立海上中学校

江島彩華さん

【福祉の心をもって夢にむかう】

シルバーケアセンターを見学し  
て、笑顔を絶やさずに働く職員  
の方に感動しています。

そして、自分も福祉の心をもつ  
て夢に向かっていこうと心に決め  
ました。

○3席 旭市立第一中学校

竹内鈴音さん

【ボランティアの素晴らしさを学ぶ】

仮設住宅にゴーヤを植えるボラ  
ンティア活動を通して、ボランティ  
アの真の意味を発見しています。

それは、自分の意志で取りくむと  
いうことです。大きな成長です。

○3席 旭市立海上中学校

穴澤美咲さん

【介護を通して】

祖母を介護するようすや祖母を  
思う気持ちがあひひしと伝わって  
きます。家族や周りの人達の協力  
の大切さが述べられています。そ  
して、自分でできることをしっか  
りやろうとしています。

中学3年生選評

○1席 旭市立第一中学校

花澤実奈さん

【バリアフリーとバリアフリー】

今まで考えたこともなかった『バ  
リアフリー』の考え方に気づき、  
自分で調べて、自分のものにして  
います。文章構成もしっかりして  
います。

○2席 旭市立第二中学校

保坂もも子さん

【平等】

『障害』とは『苦手なこと』だ  
ととらえて、人間は誰しも障害を  
もっているのだと述べています。  
そして、障害者の気持ちを読みと  
ることが大事だと主張しています。

○3席 銚子市立第五中学校

梅澤香菜さん

【祖母の介護を通して学んだこと】

祖母との温かい交流が描かれて  
います。介護を通して、人は老い  
るということ、誰かの支えが  
いるということ、誰かの支えが  
いるということ、誰かの支えが  
いるということ、誰かの支えが  
いることを学びました。だから  
こそ、今を精いっぱい生きようと  
心に決めています。

○3席 旭市立第二中学校

林尚輝さん

【それでも頑張る】

特別支援学校の体育祭を初めて  
見学し、深い感動を味わいました。  
それは、障害をもっていても決し  
て諦めない姿でした。

妹のために、自分のできる手助  
けを続けようと決心しています。

○3席 匝瑳市立八日市場第二中学校

須合綾子さん

【ガールスカウトでのボランティア】

五歳の時から入っているガール  
スカウトでのボランティア体験に  
ついて述べています。ボランティ  
ア活動は、相手も自分も幸せな気  
持ちになる魔法のようなことだと  
考えています。



# ◆優秀作品紹介◆

「ボランティアをやって」

旭市立中央小学校

四年 林田 陽飛

ぼくは、夏休みに、旭市中央病院でボランティアのお手伝いをさせてもらいました。ぼくが中央病院でボランティアをやるうと思っただのは、自分のおばあちゃんが手と足が不自由で、あまり歩けないので、中央病院に行って車イスをかりた時に、ボランティアの人達を見たからです。ぼくは、おばあちゃんの車イスをおしたりしましたが、ボランティアの人達が、他にどんなことをしているか、知りたいと思いました。

ボランティアの人たちは、病院の入口に立っています。そして、病院の入口にとうちやくした人をよく見ていて、手助けや車イスが必要だなと思ったら、車イスを使うかどうか聞き、必要なら車の近くまで車イスを広げて持つて行ってあげていました。その後、入口から受付まで車イスをおしていくのを、ぼくが手伝わせてもらいました。車イスをおす事は大変ではなかったけど、おす速さのかけんが難しかったです。ぼくが思っていた以上に、車イスを利用する人が沢山いてびっくりしました。50台以上ある車イスが、全部かし出されて足りなくなる事もあるそうです。ぼくは、1時間の中で7人の方の車イスをおすのを、手伝っていました。ぼくのおばあちゃんもそうですが、車の乗りおりやトイレ、そして広い病院の中を回るのが大変そうでした。ぼくが手伝っ

た人はみんな「ありがとう。」や「えらいね。」と言ってくれました。とてもうれしかったです。病院の中では車イスの人だけではなく、目が見えない人やつえをついている人、カートをおしている人、お年寄り、手助けが必要な人はいっぱいいました。大変そうでした。でも、「リハビリ中の人もいるからどこまでお手伝いしたらいいかわずかしいんだよ。」と、ボランティアの人が言っていました。病院の中には、体の不自由な人のために、車イスマークがついた色いろな場所がありました。エレベーターのボタンは、低い所についていたり、病院のあちこちに手すりがついていたり、トイレは引き戸で中がととても広く手すりがついていて、呼び出しのボタンがついていました。それから受付のまど口と機械が低くなっていて、車イスの人が使いやすいようにしていました。車イスせん用のちゆう車場もありました。待ちあい室にゆうせんせきもありました。病院の中には、体の不自

由な人が利用しやすい様に、くふうした場所が沢山ありました。病院の中以外にも電車内にはゆうせんせきがあったり、駅によっては、エレベーターにも、車イスマークがついている所もあり色々な場所で、車イスマークがついていました。ぼくは、車イスではないけれど、お母さんと妹のベビーカーをおしてでかけた時、階だんの登り下りが大変でしたが、駅にエレベーターがあって、とてもよかったです。思ったので、車イスの人や体が不自由な人は、必要だなとわかりました。でもとても元気そうな人も使っていたので体の不自由な人や本当に必要な人に先にゆずってあげたりしなければいけないと思いました。ぼくの住んでいる町や色々な所にも、もっとそういう良い場所がふえるといいな、と思いました。

病院の中のボランティアの人は、入口のお手伝いだけではなく病院の中間地点にも立っていました。そして広い病院の場所案内をした

り、落し物をとどけたり、エレベーターのボタンをおしてあげたり、とびらをおさえてあげたり、カーブの使い方をおしえてあげたり、色々な事を、きびきびと、親切にやさしくこうどうをしていて、すごいなと思いました。

病院に来ていたお年寄りのふうで、その人達は、一人は車イスでした。その方たちはとても不健全そうでしたが、ボランティアの人たちに、色々と手伝ってもらって、ぶじに、病院の事を終えています。病院に来ている体の不自由な人の中には、そういう二人とも体のどこかが不自由な人達や、つきそいの人がいなくて一人で来ている人もいました。

今、中央病院では、ボランティアの人が、なくてはならないボランティアで、とても大切な役わりをはたしているそうです。でも、ボランティアの人達ばかりではなく、回りの人達がもっと気がついて、親切にすることも大切だな、と思

いました。ぼくが手伝った人達に「ゆう気や元気をもらったよ!」と言われたりかんしゃされて、とてもうれしかったので、そのことをわすれないで、これから色々な場所で、何か困っていたり、大変そうな人に気づいたら、ボランティアの人の様に、やさしく親切にできる人になりたいです。

### 「受けつがれる命のバトン」

銚子市立双葉小学校

五年 富田 凌

時々しか会えない岐阜県のおじいさん。ぼくのお父さんのお父さんだ。身長が高く、百八十センチメートルくらいで、お父さんと同じくらいで、カッコイイ。

ぼくは、おじいさんに会う時は、いつもきんちようした。それは、お父さんが合う時間を大切にしていたからだ。年に数回しか会えないけれど、会える日は、その時間

を有効に使い、楽しんでいた。おじいさんは、仕事を一生けんめいにやり、とてもえらくなって、たいしよくしたそうだ。仕事の付き合いからか、お酒とタバコを多く飲み、それが原因かどうかかわからないが、食道ガンになってしまった。

ガンになってからというもの、十一時間の手術をし、その後も大変つらい思いをした。お父さんも仕事を休んで、心配なので、手術室の前にいたそうだ。いろいろと治りようをして、その何年間か、ガンが治ったようであった。

おばあさんと沢山の海外旅行をし、空の旅や船の旅を楽しんだ。食事は思ったように、食べれなかったけれど、旅行をして、ガンのいたみから解放されたかったようだ。

元気な時には、毎年ぼくの家族とも一しよに温泉にも行った。温泉に行っても、温泉に入らず、食事あまり食べられず、ただ、良い空気をすうことが、心地良いというだけだったのかなと思う。

みんな心配する中、おじいさんの病気は、ちがう場所に、ガンを作ってしまった。また、手術だ。沢山切っている身体を、また切らなくてはならないガンの病気。

「治して生きるぞ。」  
と、おばあさんにはげまされて、おじいさんは、手術に望んだ。

それから、放射線治りようなどに通い、大変であった。身体中がいたい、食事を飲みこむと痛い、言っていた。普段のご飯は、やわらかめで、固形のもの、苦手であった。

何度も手術をして痛い思いをして、毎日すごしているだけでも、つらい状態になり、とうとうおじいさんは、ずっと入院することになった。

毎年一緒に行く旅行も、おじいさんとおばあさんも一緒に行けず、部屋が広く感じてさみしくなっていた。あんまり楽しくなくて、お父さんもすぐ帰って、病院にお見まいに行った。

もうその時、あまり声が出なかつ

たけれど、おじいさんは、ぼくたちにかっこいい所を見せたくて、いろいろと起きて話していた。夜眠れなくて、昼少し寝れるという、毎日を送っていた。

お父さんも心配で、二週間に一回、仕事が休みの日を使い、新幹線でお見まいに行った。

おじいさんは、今年の夏以降、食事が取れなくなり、ずっと栄養剤などの点滴を打っていた。うでは、はれあがり、どちらのうでも紫色になっていた。もうこれ以上の手術は、できなかった。お手洗も行くことができなくなり、オムツとなった。

「何もお手伝いすることができなくて、すみません。」  
と、ぼくのお母さんは、電話で涙ながらにおばあさんに話していた。おばあさんもおじいさんの看病で、心がゆれて、身体が疲れて、かわいそうだった。

「いろんな思いがあるのよ。」  
と、おばあさんは言っていた。おじいさんと知り合った時のこと、

子どもたちを育てた日々のこと、夫婦の歴史は長いようで、あつという間だということを教えてくれた。

おばあさんが愛して大切にしていたおじいさん、ぼくの尊敬するおじいさんは、昨年末に亡くなった。悲しくて、仕方がなかった。

ぼくのお父さんは、お父さんの兄弟三人集まって泣いていた。みんなおじいさんの子どもだ。おじいさんから、子どもたちに、そのまいたぼくたちに受けつがれている命のバトン。ぼくは、おじいさんからもらったこの命を大切に生きていこうと思う。もっとずっと会えると思う。おじいさんからは、命は永遠ではないと教えてもらった。ぼくの今、できることを、一杯やることがおじいさんの喜びことだと思ふ。そして、遠くに離れているおばあさんにも電話で話し、元気であることを伝えたい。



## 障害者やお年寄りの気持ち

旭市立千潟小学校

六年 中村 柊斗

ぼくの祖母は、今年の八月に病気のえいきよで足が壊死してしまい、足のひざ下から切断手術をしたので、今は慣れない義足で歩く練習をしながら生活をしていきます。右足も健常者のようにうまく動かず、高い階段の上り下りだけでなく、外出先での人目にもとても苦しんでいます。

今年の六月にその祖母が、ぼくの家に来ると聞いて「足大丈夫かな・元気かなあ・」と少し不安まじりでしたが、楽しみにしてました。

いよいよ、祖母が来る日になりました。習いごとから帰ると、元気そうに笑って、  
「おかえり。久しぶり。」と言って、  
くれて、元気でよかったと思ひ、  
ほっとしました。周りの人はどん

なことをしてくれるかなと少し期待して夜ごはんを食べに行くこと、周りの人は祖母が義足だということをしらないため、道を作ってくれたり、席をゆずってくれたりはしてくれませんでした。ぼくはこれを見て、お年寄りに席や道ぐらいゆずってくれてもいいじゃないかと思ひました。周りの人のゆずる気持ちが少なくてがっかりしました。

夜ごはんを食べ終え、家に帰るとすると、祖母が家の高い階段で苦しんでいました。ぼくは、  
「大丈夫？」  
と声をかけましたが、大丈夫ではなさそうな表情で、

「大丈夫。」と言っていました。その姿に改めて、祖母はかわいそうだなと思ひました。

家に入り、そろそろ寝ようかという時に、祖母が横になるのにもとても苦しんでいたのを見て、手伝ったのですが、ぼく一人ではできず、お父さんとお母さんが代わりに手伝ってくれました。何もできなく



て、役に役立たなかった自分がかくやしかったです。

次の日、祖母がトイレに行くのを手伝ってあげると、今度は一人でできて、祖母が、

「ありがとう。」  
 と言ってくれたので、少しは役に立ててよかったなと思いました。

ぼくはこの体験を通して、ゆずる気持ちや手伝うやさしさは、お互いがいい気持ちになるし、笑顔にもなるので、とても大事なことなんだと思いました。そして、ぼくはこの体験や思ったことをもとに、一つの考えをもちました。ニュースでもやっているように、これから少子高齢化が進む中で、介護施設のあり方や階段の高さの調節などを見なおしていかなければならぬのではないかと思えます。

介護施設については、だれでも払えるような金額で、安全で安心してあずけられる介護施設をじゅう実していかなければいけないと思えます。そのためには、周りの人の強さも必要だし、障害者やお

年寄りを冷たい目で見てはいけな  
 いと思えます。

階段については、一段一段の高さを低くしたり、手すりをつけたりする工夫もいかもしれませんが、エスカレーターやエレベーターだと少し危険で不安になるから、エスカレーターはスロープにしたり、エレベーターは入口を広くするの  
 もいいと思えます。

それでも一番大切なことは、階段やエレベーターなどで障害者やお年寄りが困っていたら、周りにいる人が進んで声をかけてあげたり、手伝ってあげたりすることだ  
 と思えます。「自分は忙しいから」とか「だれかがやってくれる」ではなくて、「自分が手伝ってあげるんだ。」、「声をかけてあげるんだ。」という気持ちで日々を過ごしていれば、障害者やお年寄りも一人で抱えこまないですむのかと思えます。また、思いやりの気持ちをもって、笑顔で接することも大事だと思えます。

障害者もお年寄りも、みんな同

じ人間として生まれてきたのだから、助け合って強力で生きていこうと強く思いました。

### 誰にでも明るい社会を

旭市立飯岡中学校

一年 加瀬 愛実

私の祖母の妹さんは、年れいは六十才をこえています。私はこの妹さんをおばさんと呼んでいます。おばさんは、寝たきりです。祖母に、「どうしておばさんは、寝たきりなのかな?。」と小学校時代に聞いたことがあります。祖母は、「妹は、生まれた時はわからなかったけど、ほとんど歩くことができなかったんだよ。今で言うならば、小児まひではなかったのかな。」と答えてくれました。自分が祖母の家に行くといつも大きな声で「愛ちゃんいらっしやい。」と笑顔で話しかけてくれます。私はおばさんに聞こえるか聞こえない声で「こんに

ちは。」と返事することが多いです。寝たきりのおばさんは、テレビを見るのが一日の日課です。トイレや食事すべて、祖母が世話をしています。祖母は、小学校の時はおばさんをおんぶして学校へ行ったと言っていました。今の私には想像はできません。祖母とおばさんはずっと一緒です。

何年前から、おばさんは、介護施設にショートステイを始めました。祖母の心身の負担を軽減することや、おばさんが家から出て泊まり等をするのでいろいろな人とふれ合ってほしいと、おじや祖母が話し合って介護保険を利用して施設利用を始めました。介護保険の介護認定区分ではおばさんは要介護度「五」で、介護がなければだめだということが認められました。介護保険制度を利用することで、祖母の負担が減り、ショートステイの間、気持ちのリフレッシュができるということです。おばさんは、介護保険のことはあまり気にしていない様子ですが、本当



に楽しみにしていることがわかります。祖母の家に行くと「愛ちゃんカラオケやったよ。」「○○食べたよ。」など今までにはなかった楽しい体験について話してくれます。その話している顔が本当に笑顔で、聞いている私も思わず聞き入ってしまうような話し方です。私が、「また行きたい?。」と質問すると、「行きたいよ。」「カラオケ楽しいよ。」など目をかがやかせて教えてくれ、早く行きたい気持ちも伝わってきます。ショートステイを利用して

いる方はおぼさんの他にもたくさんいるということですが、生まれながら障害を持っているおぼさんのような人から途中から障害をもった人もたくさんいると思います。介護保険等の法律が出来ることで、家の中でしか生活出来なかつた障害をもたれている方が家を出てショートステイすることが出来るようになったことは、日本の社会の考え方が進歩し、少し明るくなったのだと思います。障害を持っている人が介護をされ

ながらも、違った世界でいろいろな人々と関わりを持つことが出来る社会は、素晴らしい社会だと思います。おぼさんのように寝たきりの人でも、楽しみを持つことのできる社会は明るい社会と

言っています。税金等の負担が父や母にかかっていることは知っていますが、でもハンディキャップを背負った人たちのために役立っていることは素晴らしいことだと思われ、私も将来一人の労働者として、ハンディキャップを背負った人々が明るく元気に過ごせる社会を作ることが出来るようにがんばっていきたいと思っています。そして、社会全体で弱い立場の人々を助けていけるような明るい社会ができるようにがんばりたいと思います。医療の世界では、おぼさんのように生まれながらハンディキャップを背負った方々も明るい笑顔が見られる生活ができるように、技術の向上をめざしてほしいです。また、社会全体で考えていくことがとても大切であると考え

ています。おぼさんが笑顔で過ごせるように、また、楽しく話す様子をこれからも支えていけるように、私自身も、元気に生活していきたいと思えます。

### あれから一年、介護について

旭市立第二中学校

二年 高橋 直大

私は、中学二年生まで福祉に関して何も興味がなく、困っている人がいても見て見ぬふりが多かったです。しかし、家族が介護をしているのを肌で感じてみて福祉に対する考え方が変わりました。

曾祖母が、がんで入院したのは、昨年の七月でした。体調が急変し、私たちの声掛けにも反応しなくなり、医師から「残り数日しか生きられない」と宣言されました。

入院するまでは、祖母が曾祖母のために、食べやすいように料理も工夫して煮た野菜を細かく切っ

て、スプーンで一口ずつ食べさせてあげたり、着替えやおむつ替えも小柄な祖母は介護ヘルパー時代に習った替え方を思い出しながら、頑張つて替えていました。替え終わると「きれいになったよ」と優しく声をかけると曾祖母はうれしそうに、にっこり笑つて「ありがとう」と一言、私も手伝つてあげたけど恥ずかしくて手伝つてあげられませんでした。そんな祖母がホッとひと息つけるのは、曾祖母がケアセンターに行っている間だけだったと思います。

入院中は、家族全員で交代で手助けを行いました。最初は、介護に対して戸惑いも多く何もできなかった私は、ただ見守っていることが精いっぱいでした。少しでも役に立ちたいと思いつつも、口腔ケアなどを頼まれると、嫌々している自分がいました。

しかし、一生懸命介護に立ち向かう家族を見ると、そんな自分が情けなくなり、少しずつでしたが介護するようになりました。

自分にできることはしたいと思い、床ずれ介助や食事介助も積極的に取り組みました。家族の負担を軽減したい気持ちと、曾祖母っ子でもあった私は今までかわいがって

きてくれたことに感謝し、恩返しする気持ちを忘れずに接しました。日が経つにつれて、病状も思わしくなくなりまし

た。体を動かす力もなくなくなってしまったために、食事

も食べられずに点滴で栄養を取り始めたり、話が上手にできなくなり、ただうなずく程度になつて

しまったことがかわいそうに思いました。また、点滴もだんだんと

できなくなり、首の所から入れている状態になり、とても痛々しく

いたのを今でも思い出します。いっぱい肩もみしてあげれば良かった

なと今でも思います。曾祖母がいなくなつて今でも本

当にさみしい気持ちでいっぱいです。曾祖母宅に行くたびに「来た

の？」といつも笑ってくれた曾祖母がいなのは、さみしいです。

曾祖母の介護を通して学んだことは、一人で介護するのではなく、

家族全員で協力し合うことにより、みんなに余裕ができ、笑顔も増えて

いった方法があるのだと思いましたが、これを利用することによって、

家族はストレスもたまることなく利用者も社会参加することがで

きるのだと思います。しかし、施設に頼るばかりではなく、家族と

きちんと向き合い、介護を身近に感じること

も忘れたいです。曾祖母の介護を通して、孤独を感じさせないこと、

介護する側も自分一人で悩みをかかえないこと、そして家族に理解や協

## バリアフリーとバリアアリー

旭市立第一中学校

三年 花澤 実奈

「バリアアリーって知ってる？」

叔母のために、家の中のバリアフリーを提案した私に母が言いました。私の叔母は、足が生まれつき悪く、手術をしたのですが足が良くなることはありませんでした。そのため今でも松葉杖を使って生活をしています。一人では階段も昇れず、車に乗ることもできないのです。つまり、叔母は誰かの助なしには、一人で何もすることができないのです。だから、もつと叔母が生活しやすく、介助する人にも優しいバリアアリーに家を改築した方がいいと思つて、私は提案したのでした。

「何、それ？バリアアリーなら知ってるけれど、バリアアリーなんて聞いたことないよ。」すると母は次のようなことを説明してくれまし



た。バリアフリーとは、障害者が自分で持っている能力で乗り越えられる程度の障害を残して置くことだということです。

「全てをバリアフリーにしてしまうと、それに頼って努力しなくなってしまうでしょう。そうしたら、人に頼るばかりで、自分が今持っている力も失ってしまうかもしれないじゃない。だから、少しは自分で努力する部分も残しておかないくちや。」

母のこの言葉を聞いて私ははっとしました。確かにそうだ、なるほどと思えたからです。そこで、バリアフリーに興味を持った私は、もっと詳しく知りたくなり、調べてみました。すると、バリアフリーとは、段差、坂、階段など、日常で遭遇する可能性のあるバリアを意図的に配置した施設を言うのだそうです。障害者や高齢者のためだからといってバリアフリーを増やしたことによって、体力が下がってしまったということがあったそうです。そこで新たに考え出され

たのが、このバリアフリーという考え方。バリアフリーにしたことで、体力の維持ができたことはもちろん、今までできなかった動作までもできるようになった人がいるということでした。

私はこれまで何も考えずに、叔母や介護をする人が楽になればと思っただけバリアフリーと言っていました。実はそれが本当は叔母のためになることではないのかもしれないと思えてきました。そう思えたとき、私の脳裏に浮かんできたことがあります。それは、今年パラリンピックで活躍した選手達の姿でした。彼等は、そこで生き生きと競技し、私達健常者と全く変わらず輝いて、多くの感動を私達に与えてくれました。あの人は障害者でありながら、残された能力を最大限に使って努力し、辛い練習も乗り越えて自分の目標を叶えているはず。改めて、私は自分の叔母のことを考えてみました。叔母は一人では何もできないと決めつけていたのは、実は

もしかしたら私自身だったのかも。しれない、叔母はやりたいたいことがあるのに、みんなに悪いか迷惑をかけたくないとか考えて諦めてきたことがこれまでにたくさんあったのではないか……。私にはだんだんそんなふうに思えてきました。ひよっとしたら、叔母にも残された力でやれることはきつともっとたくさんあるのかもしれない。叔母の心の声にこれまで耳を傾けて聞いてみたことが私にあったのだろうか。バリアフリーという考え方に逢って、私は初めてそんなことを考えたのです。

もちろん、バリアフリーの考え方は大切だと思います。私はそれを否定しようと思っただけではありません。たとえば、町の中によく見かける信号機のメロデーやスロープ、障害者優先の駐車場など、これまでたくさんの人達が知恵を出し合い、改善してきた便利で役に立つものです。当然バリアフリーが必要な場所や場面はたくさんあるのです。しかし、私は

母が言うように、バリアフリーの必要性もまた感じるのです。全てを助けてしまうのは、その人をただの人形のように扱うことではないでしょうか。本当のバリアは心の中にこそあるのだと私は気づきました。その人が何を望んでいるのか、どう支えてほしいのか、それを考えて必要なものを用意し、手を貸すことが大切なのだ、私はそう思います。

だから、これからは叔母が一人では何もできないと決めつけずに、叔母のやりたいことを一緒にやるようにしたいと思えます。少しでも叔母のためになることをやりたいです。





# 第21回福祉作文コンクール入賞者

## 小学4年生の部

1席 旭市立中央小学校

林田 陽飛

2席 旭市立琴田小学校

吉野 杏優

2席 旭市立嚶鳴小学校

伊藤 温規

3席 旭市立共和小学校

加瀬 碧

3席 旭市立三川小学校

神原 希羽

3席 旭市立萬歳小学校

實川 志穂

## 小学5年生の部

1席 銚子市立双葉小学校

富田 凌

2席 旭市立中央小学校

小林 ひとみ

2席 旭市立中和小学校

高山 愛美理

3席 旭市立飯岡小学校

加藤 希美

3席 匝瑳市立豊栄小学校

高橋 空

3席 旭市立中和小学校

伊藤 愛美

## 小学6年生の部

1席 旭市立干潟小学校

中村 柊斗

2席 香取市竟成小学校

小山田 智輝

2席 旭市立中央小学校

中西 未渚美

3席 旭市立干潟小学校

柴山 啓

3席 旭市立中央小学校

多田 遼平

## 中学1年生の部

1席 旭市立飯岡中学校

加瀬 愛実

2席 旭市立海上中学校

宇野 詩織

2席 銚子市立第二中学校

加瀬 翔大

3席 匝瑳市立八日市場第二中学校

増田 康希

3席 旭市立第二中学校

市川 麻央

## 中学2年生の部

1席 旭市立第二中学校

高橋 直大

2席 旭市立海上中学校

江島 彩華

3席 旭市立第一中学校

竹内 鈴音

3席 旭市立海上中学校

穴澤 美咲

## 中学3年生の部

1席 旭市立第一中学校

花澤 実奈

2席 旭市立第二中学校

保坂 もも子

3席 銚子市立第五中学校

梅澤 香菜

3席 旭市立第二中学校

林 尚輝

3席 匝瑳市立八日市場第二中学校

須合 綾子



医療 療養施設  
 海上療養所  
 就労継続支援B型事業所  
 ワークセンター  
 地域生活支援センター  
 友の家の  
 医療型障害児入所施設・療養介護事業所  
 聖母療育園  
 生活介護・児童発達支援・放課後等デイサービス(重点)  
 児童発達支援・放課後等デイサービス事業所  
 地域生活支援センター  
 障害者支援施設  
 障害者マリア施設  
 障害者支援施設  
 障がい者の就労促進事業所  
 みんなの家  
 障害者就業・生活支援センター  
 東総就業センター  
 生活介護事業所  
 聖家族作業所  
 共同生活介護・共同生活援助事業所  
 グループホーム支援センター  
 高齢者支援事業  
 ロザリオ高齢者支援センター  
 ロザリオ訪問介護事業所  
 通所介護・介護予防通所事業所  
 デイサービスセンター・ローザ  
 中核地域生活支援センター  
 海匠ネットワーク  
 旭市相談支援事業  
 旭市障害者支援センター  
 障害者支援施設  
 佐原聖家族園  
 つどいの家の  
 共同生活介護・共同生活援助事業所  
 クアホーム香取・グループホーム香取  
 市相談支援事業  
 香取障害者支援センター  
 障害者就業・生活支援センター  
 香取就業センター